



全傳

勇婦  
法本文料書

三編

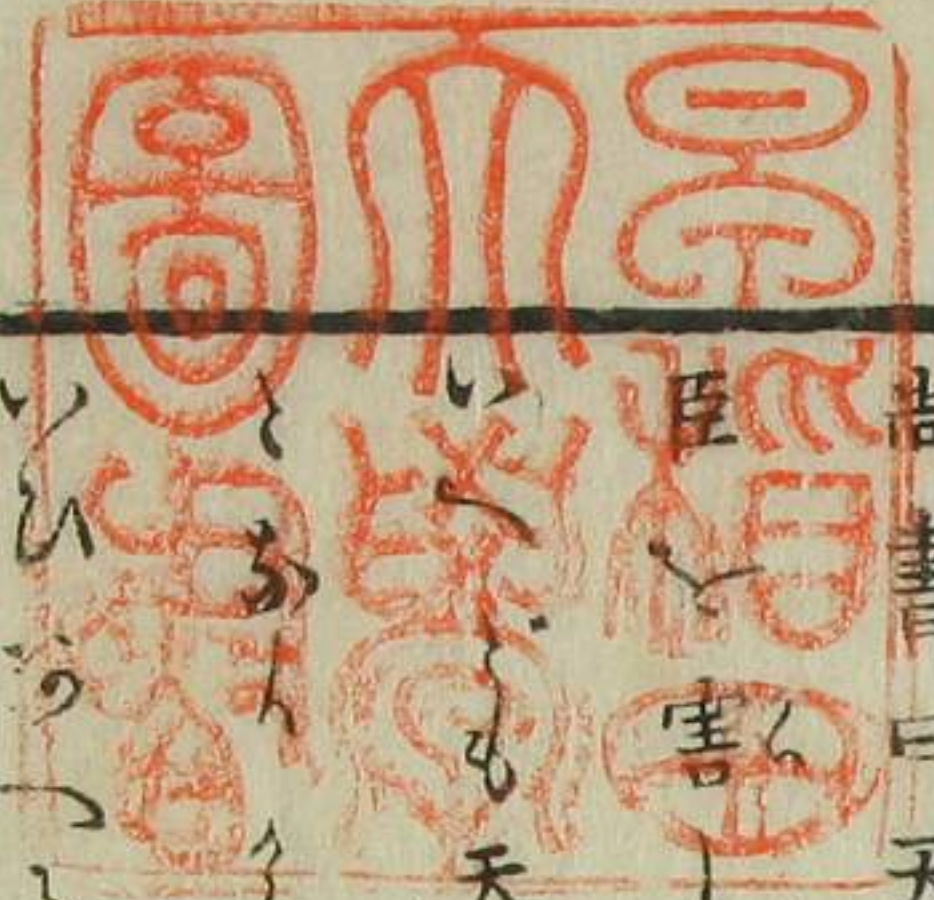
卷之五





明遠13  
號 977  
卷 15

大補



勇婦繪本更科草紙三編卷之五

遠州小夜中山麓栗杖亭魂野著

尼子忠臣の輩都小會話

尚書曰天所惡天必誅之宜成哉尼子九郎左工門ハ忠

臣ト害一其君ト捕子ト一其身歎示小くらとや

いふも天是と惡まごうんや勝丸時と得て將軍の聲

いふんは尼子の興る事月と待べうべ心有人ハ

主君の安否心もとなく中納言教行卿ハ

勝己の行衛と尋んと杖と力小都一登り教行卿の

内ハゆらん小ハ髪鬚いとおはらふをばせ笑て月代



勇婦繪本更科草紙三編卷之五



刺梳より行人と三条通なる髪結床一立ちり月代を  
頼んとツひ入るる畏りいともう刺刀とさう出さ人代  
見ら小秋名庵之助ありさう不思議うる裁と業を  
さうぬ人ふりくばさうく見るに秋宅も兵庫之助  
つぐく見ら率杯のすりなう先年毒殺逢  
るへ横道兵庫之助度ふもろくさう尋るに  
ねら秋宅庵之助度小侍より前刻より能も似り重  
ハおのしーゴ余りふ姿の替り中らふおぼく伺も懸  
ぐりしと手と打さう往事とさうり候先立斗り時  
に向ふより梵輪字の笠ふくぐく打冠来り者有  
秋宅指さして尽ぬ縁さう向より来らハ高橋渡之助

ふいとさうち此髪結床一来りさうめさうハ音信さうし  
は彼四方の機嫌はさういちやとつら小秋宅兵庫之  
助と引合さうさハこはいりよと三人無更と悦が愛  
往還なり我住方一来りさうと庵之助二十歩さう  
行て一ツの家小伴い九郎左工門が妍計と憤勝丸  
君ハ安藤鹿之助の蘓生まさうさつさら小語さうハ  
兵庫之助大小悦い三人さう連東福寺小来ら  
北典司三出幸の所一来るさうり勝丸將軍家のハ  
妹白綾姫の聳とさう昨日教行卿の山館へ引移  
さういしと聞さう二人の忠臣中り上りて扱る有  
かさき更哉我が千幸万苦セー甲斐りりてふさハ





秋宅庵之助

兵庫之助 蘆生  
不計も二人の勇士小會次



横道兵庫之助

高橋渡之助

夏如全傳三編卷之三



尼子の栄と見んいさ教行卿の館へ参り勝九君  
 も目小く一日も早く九郎左門と亡く手摺  
 めぐりさんと兆典司ふいとまよと告教行卿の館へ参り  
 られ此日大谷古指之助も近ごろ菊酒屋の樽拾いと  
 りりも世と忍びが勝九の出世京中小隠かきまは  
 お菊諸とも中納言名の館へ参り三人の忠臣小達悦  
 り限りか一教行卿も立出さひいささ勝九  
 が出世まづく慶壽院の内館小勝九とくおれ  
 近く新殿の造営あるまきり中へ慶壽院の内  
 館へ引移りさう急き汝等も立越へ勝九と補佐い  
 をせよと宣へ四人のともども悦り絶て勇進ん

て立ちへまは菊酒屋のおきくも久く小て柵九重  
 姫小面會一鹿之助が行衛と尋り獲生い  
 て下郎小身とやつし出さひて其後ハ音信か  
 宣ふ小菊ハ大い根と都小おはさせて無支の  
 小貞とも見せさへべきに難面の方や此度の悦と  
 らずよもや此館へ参りぬ事ハハ菊の根  
 せしとて傳へられと言ゆきて歸り且説  
 山中鹿之助ハ下郎となりて二年の星霜と経し松  
 永彈正ハ三好の家来かぐり威勢管領のま心所  
 候ハハ此人小便て尼子再興の媒とんと婿と暮  
 せしゆり將軍家の草履とるも



松永彈正と古主のどく致ひくれハ彈正も彼が志し  
昔一と忘ぶれと悦び折あふきてハ將軍へ抗成くる  
此年も過く三年の厄も終りくれハ今年こそ大儀  
と思ひ立んと心と定らくるハ勝丸將軍の聲とあり  
あふと聞き時至りくと心イ悦び猶も身と謹りて  
中々と伺ひくは勝丸ハ尼子四郎勝久と成て心悦  
不日小九郎左工門と亡人と思しくは所へ横道兵庫  
之助高橋渡之助秋宅庵之助大谷古階之助慶壽院の  
山殿へ来りくれハ勝久大悦び將軍小もむくと上  
四人と扶助しあへども山中鹿之助行衛志まされハ  
心と痛らたハくは或日將軍慶壽院の御殿へ

入らせくるハ四郎勝久ハ式臺へ出迎し立出くハ將軍御  
會釋りりて奥へ通りあふハ草履と販者ともあ  
小鹿之助あつこいといふれと思しらせども奥ハ案内  
らくあふくれハの序彼草履しりの來由ときつみ  
あふ將軍笑いせあひて下郎ハ松永彈正ハ草履あふり  
かりハ去年雷獸と捕ハ強氣とのぞけハ彈正に  
えき我草履しりしやもりと委しく語りあふ勝丸  
さてハこの者のこそ尼子家一人の英雄山中鹿之助と  
や者あふくい去る頃九郎左工門ハ奸計ハ當り毒酒と  
のハ相果いひハ有馬お浴して蕪生ハ侍る夫とあひ  
跡と隠し何方あふりとも行衛とあふべいハハ



名と隠し草履とつらしてけりけり物語りにまへ  
將軍も驚きうひ滅し山中鹿之助が事ハ兼て聞及し  
勇士ありうく下郎と成て主家と思ふ忠臣感と  
余りけり呼出せと上意けりけり松永弾正も  
けり其席ふけりけり大不感一某が草履つらし  
頃けり九者と思ひにさうく様一ひひが名もえき  
下郎とのち中只今ふ至りても某と古主と敬ひけり  
天晴の勇士ふけり勝久ハ能家來と持ふと一座大  
賞美せけり所一奴姿のま鹿之助遙下つて和ゆきハ  
松永声けけけ名と包是まで有けり將軍おも感  
思一近ふ泰りて勝久ふも對面けりけりと言ふけり

鹿之助思入某奸計小けりけり尼子の家没落仕るまへも  
存ざば冥鬼と成べき身の天の助けりて獲生仕るまへ未  
天運の尽る所と存何とぞ勝久と守立尼子再興と  
計るといつても寄辺なき身ふまは當時松永公と老  
煉の英雄がしハ是小便けり勝丸がふとこのと泰らせん  
と通傳と求て下郎の奉公と仕る所けりけり將軍の  
直泰と成けりけり此大儀とこのまん人も松永公より  
外ふとけりドと主君のけり是まけり敬ひけりあり  
今天の時至りて勝久將軍家の智君と成ふ上も  
一時もけりやく敵九郎左五門とけりけり亡けり勝久を富  
田の城主小けり義久と毛利よりけり返一親子對面





勝九君世に  
早助足利公へ  
御目見  
次



其外小孫がいはははと涙をたらくと流しつゝ  
 彈正も鹿之助が天下の英雄と稱し奉公と誓ひ  
 聞大い悦び將軍ふひひ鹿之助が忠臣感入の集  
 見込奉公とのぞきと兼る上も麻略ふらぎ小非  
 居城河内志貴山よりいどの軍兵ハ加勢一遣  
 といふや本意と遂らきよと世小そのりく  
 宣も將軍も悦びひ勝久もや九郎左門次  
 古一會誓の恥と雪ぐる一彈正猶も心と付勝久  
 補佐とその入と上意一松永元來慢心ゆる男  
 我とその入と將軍の仰つて鹿之助が天下一人の  
 勇士ありとふと大い悦び不日小雲州發向せん

其日ハ將軍諸も山館へ歸りける

早川點之助龍宮より歸荒浪破の助が傳

叔も鹿之助と勝久の館一苗多一兵庫之助早苗之助  
 渡之助庵之助古猪之助の輩久くふく對面一悦事  
 限一此く一日もやく雲州へ發向せん相談  
 下り一そのもふも軍用金の支角もなすば當時  
 將軍家ふも乱世ふも有無の足利家ハバ  
 の思ふ小任せなる心と傾ハせ小鹿之助急度  
 思案一菊酒屋おきか方へくら越久この疎遠と迷  
 尼子家再興と心づけ下郎とあり一ゆ音信とて



せごりーとありー更にも物語におきくも大に悦ひ  
 忠臣と感ドるる鹿之助いーしくた九郎左門で  
 亡さんと思つども軍用金小一はさし何とぞ用立  
 のいことたのいれればおまきハ悦ひた母更科さあ  
 の影ふく人と成るるわさハ其の恩報どり時節も  
 りさざりー軍用金の用兼りこそ有るは  
 當時一万両むくりハ我家ーもいハ其上用おは  
 加賀トつうハさんとつふ小鹿之助悦ひ一万両は  
 事足ー暫く借用せんと約して立歸りまきハ  
 四人の勇士も悦びいさ一日も早く出立さんとつふ  
 鹿之助兵庫之助と呼て足下の内室更再室の津に

勤とささるる頃日の物語ふも感心せり尼子の  
 家臣ハ女房と傾城ふ賣ーふど風聞りてハ家  
 の穢りりやく身清して歸りなハ我ハ兵庫の  
 津おて待合さん急なると金百両渡ーせんハ横道ハ  
 有るーと勇と進んで出行りりそれより松永ハ  
 加勢の軍勢ハ陸地と播州上月の城ハ共向るハ  
 尼子四郎勝久山中鹿之助五月早苗之助高橋渡  
 之助秋宅庵之助大言古指之助、難波の浦さ  
 船ふさ葉兵庫の湊ふ漕よせられハ先達  
 兵庫之助ハ浮舟浮橋と身清ー藪中茨之助を  
 伴い来り彼が来由とささるるハ鹿之助其義氣を



感し勝久不吹挙一終不尼子の家臣と云ふ  
 尼子  
 坂之助ハ悦喜限りかきしれり所くふり勇名  
 とありハ一々家それより西須摩小碓と松ろ  
 上月のちりとと伺ふ小城代寺元生死之助田原  
 兵次赤星軍ハりり一岡へくれハ渡之助庵之助  
 詞と云ふ一寺元生死之助ハ忠臣の者ふり先年  
 某等小開城と云く然猶も九郎左五門ふ付て又簡  
 の謀と云ふとんと蜜ふトサ一者とれハ定て能  
 謀もハツヘ田原赤星ハ無謀の士何れハの支あ  
 らん早く上月と棄り根城と一て富田と取  
 返一と一と勧る所不松永が加勢の者共早陸地

より上月一押ハ日尼子勢より一日もくやく此城  
 踏潰せと勢い破竹のく見へいと注進一とんハ  
 勝久大小氣と云く松永小責落りてハ勇  
 き小似くくやく上月一押寄城と棄くハ一と  
 下知一と鹿之助くし笑ひ上月の城と取すハ  
 いと心易いからす心小けふを去くハ早  
 碓と引上播州一赴くべ一と船子も碓と上人  
 しとら一干曳の石のく動ハこれハ大驚此  
 碓の上ぐるハいふと數十人乞い声と出して  
 引といへども上るより此中小船頭徳藏  
 いハ大カ無双の若者あり一ハ大小笑ひ船頭の





船頭徳藏

早川鮎之助

早川鮎之助  
竜宮より勝九君の  
軍船へ上る徳藏  
怪力

高橋渡之助

横道兵庫之助

藪中淡之助

秋宅庵之助





碇と上る事ありて、ハ板、不甲斐なきやつと  
 裁いて、某が手並と見よと、大肌脱ぐ急いとひき  
 上りに、碇とも小大の男と引上り、此男悠  
 と船端へ上り、衣の濡と、と絞、くまば、れく  
 大小、驚海中より、凄じき、このこ、せ、上り、れ、ち、ち  
 の者、は、うら、殺せと、ひ、り、り、くと、取、も、う、げ、ず、この  
 船、と、尼子四郎勝久の軍船、を、う、ん、山、中、鹿、之、助  
 友、小、面、會、り、と、言、入、と、い、ふ、小、猶、お、り、き  
 船、中、さ、り、き、立、れ、バ、鹿、之、助、是、を、聞、く、船、槽、小  
 立、出、て、見、て、あ、ま、バ、先、年、毒、酒、小、り、り、入、水、せ  
 一、早、川、鮎、之、助、な、れ、バ、大、一、驚、水、中、よ、り、出、一

來由と尋に、鮎之助三年の間、龍宮小りり、こと  
 とも、と、語り、龍王我、り、告、く、今、尼子運開、を、勝丸  
 と、尼子四郎勝久と名乗、鹿之助と始、只、今、上月の  
 城へ、責、入、間、く、やく、歸、る、べ、一、と、竜宮城門と送、り  
 出、て、と、思、ハ、此、碇、小、り、附、此、船、上、つ、と、り  
 ち、ち、ち、ち、勝久君の、此、船、な、り、を、推、察、し、と、始、終、  
 つ、と、り、小、悟、り、れ、バ、鹿之助を、奇、異、の、思、と、な、り  
 勝久君、も、久、ふ、く、目、見、へ、と、一、先、残、の、勇、士  
 と、引、合、悦、り、限、り、な、り、と、一、只、今、碇、と、引、揚、り  
 船頭、徳藏、が、怪、力、中、に、九、人、を、一、り、り、バ、向、後、武、士  
 小、り、立、荒、浪、碇、之、助、と、名、乗、づ、一、尼、子、と、勝、久、公



より太刀鎧とたまはりしれは徳藏悦事限り  
 其大友の家臣小はひーが毛利元就小責亡され  
 終一船頭と成朽果人と口押くひひー小かく  
 見出ー小らづ事の有がさよ骨粉砕  
 して此の恩と報ド奉らんと勇とめハ鹿之助  
 大小悦び今日もうも此船一九人の勇士ら  
 揃小事勝久君の大幸ならん今より心と一ツ  
 今一人の勇士と得尼子の十勇と呼まこと必  
 ちくもといりりううと勇に進んで上月の城へ責寄る  
 上月の城と兼取尼子九郎左衛門と生捕話  
 かくて松永が加勢の軍兵陸地より責うりてまは

田原兵治赤星軍ハ凱歌をねどるき取そのも取敢以  
 雲州富田へ逃歸り寺元生死之助一人此城よ  
 止り堅固に城と守り防禦嚴重小見つ々時  
 小船路より尼子勝久山中鹿之助と初追り城際へ  
 責寄るれは生死之助ハ櫓より勝久の花よりさ  
 見より大に悦び城門と開き城と奉り且鹿之助  
 小謀と叫き捨鞭と打て雲州へ逃歸り々々鹿之  
 助城小入り民と撫育し旧臣と集々らに日々に  
 して数千の軍勢つまらるれば松永が加勢と城  
 中へり寄大に響應して大將分の人小鹿之助  
 厚く礼謝し此度松永公の以厚情小寄にやすく



上月の城手ふ入事是全く公等の功芳志なり  
 以覧の如く不日お旧臣どもつまた上の富田の  
 城と責とらん事掌の中ふあり是より以歸り  
 りりて老君一宜しく以礼まのそ奉ると勝久楮  
 も相述まは諸軍勢尤も同ト富田の城堅して  
 責はくくもなり早速飛檄よりさうや越しな  
 即刻軍勢とさ向やさんと凱歌と称つる軍  
 勢と引とり都とさして歸る此上ハ富田の城  
 と一日もそやく責落さんと勝久出陣しな  
 其日とりお隠りり旧臣ども水の低り下る  
 雲州まもろふい數百騎となりそは悦び勇

いとりふ事なり寺元生死之助ハ富田の城へ逃歸り  
 鹿之助が鋒先中いりり難しとりふ先達て  
 田原赤星逃りりふ久い生死之助城と奪れ  
 一と岡九郎左五門色と失ひさつそく毛利へ加  
 勢と乞ふ元純も九郎左五門が酒ふふけり  
 政道正しうり心と憎といつとも詮さなく  
 河野の四郎來島太郎と大將して五千余騎  
 富田の城へ加勢と九郎左五門大お悦ひ冥鬼の  
 一りの鹿之助何わいのりあらん先ごらさき  
 人と制ととりふのりまは城外ふ出て敵  
 ましんと富田の城外の河原ふ陣と鋪この時







尼子四郎勝久山中鹿之助其外の勇力士河と陣  
て陣と一き両陣軍門と開と尼子勝久く  
一く鎧ふて鹿之助と志と一みとて入立  
まひ及賊九郎左工門とやく首と渡とべ  
高らりふ宣へば九郎左工門生死之助と呵つて汝  
勝九ありとけりぬ首と我に見せ今此小見大  
言と吐と寄怪こよとつふ寺元自若とて  
某似首と奉とび昼夜とらりうとら君の  
首實檢一うふいつう某が謀り人九郎  
左工門肩とひとたいたあも其ときはまがひき  
勝九が首りり一が何あもせよらの小見生捕に

せよと大喜上黄口の小見大言と吐のわ  
さよ鹿之助汝盲人おくりき燭火の廳小至  
身の此土へ迷ひ来りしもの不便さよ瘦浪人乃  
寄合一と何かごのりうん汝等時と知バ  
勝久と生捕某一降参せよ捨扶持とくき人  
飽もも大言とけけ鹿之助抱腹して打笑  
汝ら首を以冥鬼なり憐いべ一我身とて汝  
大言と吐や汝真の豪傑なり我と生捕者  
んやと三声けけべ九郎左工門も大笑い汝  
首なき鬼なり某三ヶ国の大守とて我  
生捕のありんや三声とびるの千声万声ふも



金一何の思ふ事らうんと大音声あは  
 我と生捕者らうんと未終うは小汝  
 と生捕者ら我なりと思ふよけ後より九郎  
 左五門と踏倒し終小繩とぞかけ小なり是誰人  
 寺元生死之助なり河野四郎來島太郎  
 田原兵次赤星軍八など大いおどろきこいつた  
 九郎左五門と助人とともと鮎之助兵庫之助早  
 苗之助渡之助庵之助をけて荒浪碓之助ハ手始  
 の軍をばと真先ふと人々切てりり  
 其の中も河野四郎ハ次之助來島太郎ハ碓之

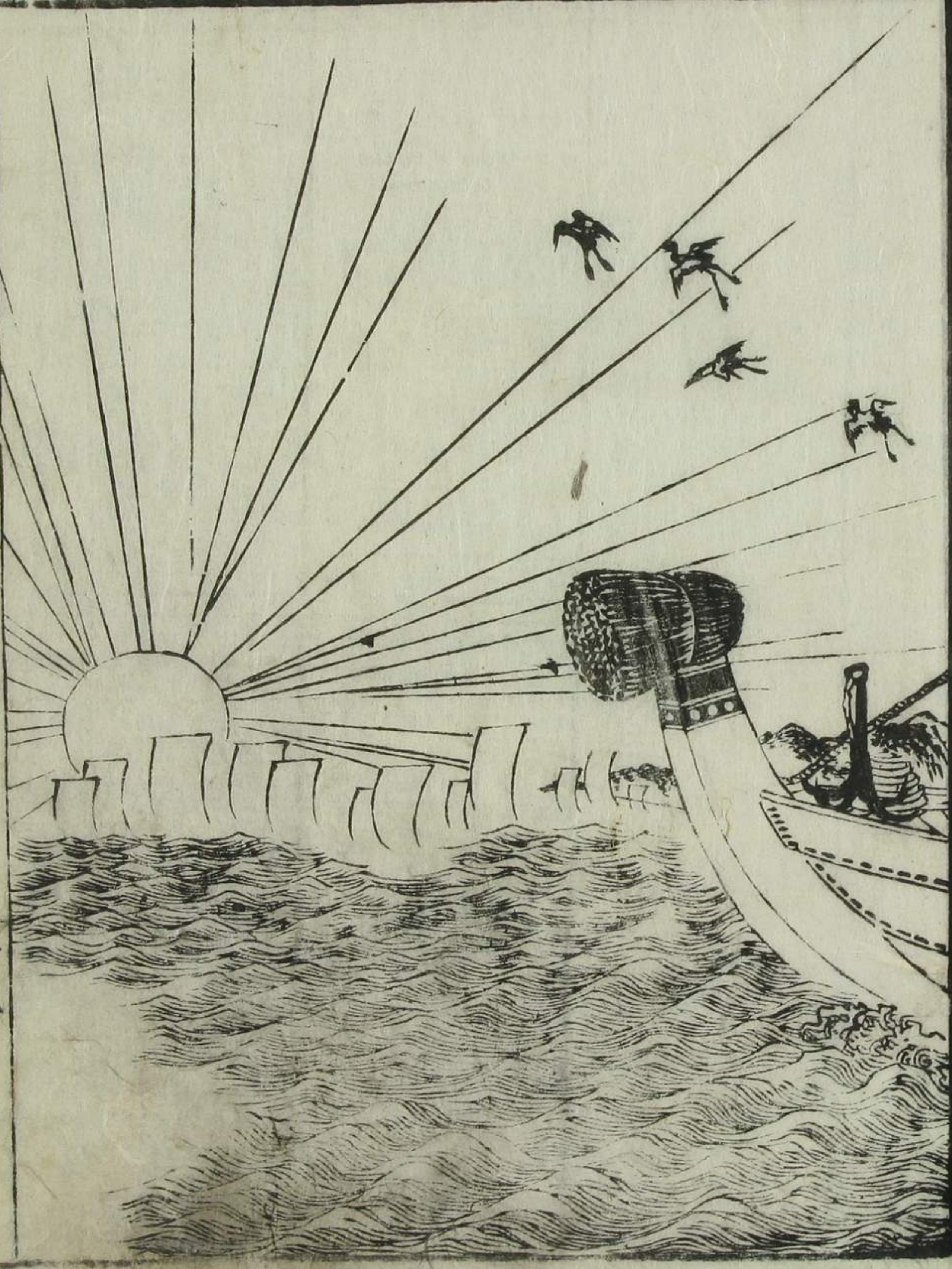
助赤星軍八も早苗之助田原兵次ハ庵之助小渡り  
 合火花と散し戦いし名ふしは英雄  
 九郎左五門が一味のともが  
 うち取り共中も鮎之助古猪之助渡之助  
 と面倒なりと大木と根をぎ小なり群居軍共  
 とういともゆき一打り五人十人うら倒るし暫  
 時々間も無人城となりふり生死之助ハ九郎  
 左五門と引立勝久の山前小列をゆきハ九郎左  
 五門盡かり返り忠の生死之助目も汁らさ  
 一事の無念さしけびのハ生死之助  
 打りひ返り忠といふも像小心の変わりハ



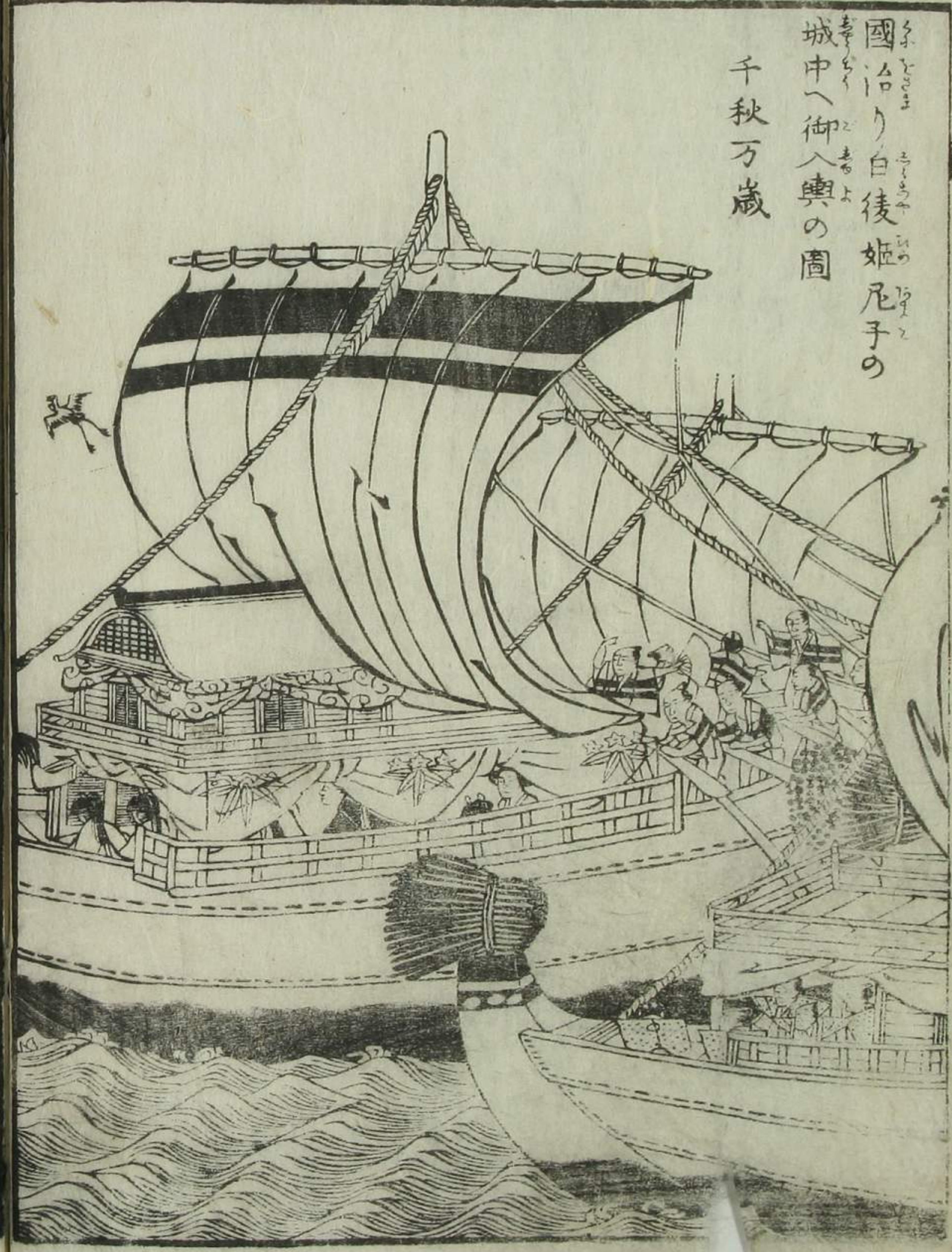
つま某も元來尼子の忠臣汝と生捕人爲ふも  
 今まも隨ひ居りし大い笑へ鹿之助生死  
 之助が忠臣と感賞し勝久君小向つゝ山家の  
 仇母君の敵彼が首と遊するべしと勸る不勝久  
 悦び多し汝が愚計ふも忠臣の筆小千辛万苦  
 とせ刺父義久君とも擒となると天罪思ひ  
 志もと首打落し多し諸軍勢凱歌と三度  
 揚り富田の城へ入りふ小城下の民鼓腹し  
 よろこび雲州大い治り多し  
 尼子義久再び富田の城へ入勝久諸士小恩賞とふ話  
 時手も尼子四郎勝久の敵九郎左五門とくち  
 亡し

うき富田の城へ入り多し毛利の加勢大将と  
 うきやうく雲州へ逃りたりかくと告ぐんば  
 元就大いおどろき此うへ義久とくち返され  
 て一大いなりと吉田の城ふも番兵の  
 けけとき防衛嚴重なり鹿之助もいんも  
 もらことなく謀と失ひ多し此と正親町の  
 帝即位料と毛利元就調進しんば帝の  
 威の余り都へりささき菊桐の御紋と勅許有  
 大膳太夫兼陸奥守しんば下されも將軍  
 の母慶壽院元就とりしれ尼子家と和陸  
 とくち扱ひさまし義久と富田へ歸りなれ





國治り白後姫尼子の  
城中へ御入輿の圖  
千秋万歳





得ず勝久と和陸一義久と雲州富田一送  
親子いさくく対面あまへ義久公鹿  
之助其外忠臣の輩とウー出され此盃と下さ  
鹿之助吹拳ふうの事真の忠臣とつと色一  
尼子の十勇そらひぬる事の大幸此上を  
中納言教行卿へ入らせりい勝軍の事を述

ての舞足の踏とる後とをうけ悦び  
くも酒屋へ返一厚く礼謝とるいおまへハ  
大不悦び其功と賞一と翌日勝久將軍  
家へ入らせりい物ぐりぬ一義輝  
公慶壽院のう後とびりて松永彈正をも  
鹿之助もいさくく松永の加勢ゆへ大功  
一いさくく老君の大恩ありやと功一礼謝  
こいさくく慢心の彈正う後とぶふりい痛



二はもと元就和睦と松永よりそのつら  
 けおとかりそきより勝久雲州へ歸國のま  
 將軍家より白綾姫とせりりるるの添  
 九重姫柵浮舟浮橋もらも船ふり  
 北典司もれせりりりり雲州へ立こへ  
 本林脇千代丸がらや福んじりり吊ひ  
 勝久もみ身がりりふなりりりりり  
 一守は建立ちあり森殿寺とつづけ義久公  
 白綾姫もどせりりりりりりりりりり  
 節とより賞一八重姫の節元死一りり  
 と歎ふ是より尼子の威勢旭の登るが

十勇の猛將補佐一りりりりりりりり  
 名將軍の智とととおと鹿之助の智勇兼  
 備りり賞一鏢と伏もり尼子もさうひけ  
 掌の中ふりりといりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりり

繪本更科草紙三編卷之五大尾



集如全作三

著作

栗杖亭鬼卯

畫工

一峰齋馬圓

彫工井上治兵衛

文政四年辛巳正月發行

書林

大匠心齋橋筋博芳町南入

河内屋茂兵衛



